

り展げる上に日高の地も一役買ったことが明らかである。

この頃の東蝦夷地の航運はすべて官営であつて、これは場所請負人が廢され直捌の制が行われたからであつた。しかも直捌官營も文化十年（一八一三）頃になると東蝦夷地の各場所はこれをやめて、請負人を附し（民營）て依然航運が継続されていた。なお場所請負人は明治二年開拓使時代に至つて廢止した。

幕府の海への関心が一段と深まつて来た文化年間はいりも岬の海でも遭難が多い。秋田藩の御用船のえりも沖合の遭難、えりも神社にまつわる物語等、そして文政六年（一八二二）の八月には幌泉沖合に外国船が見えて、その出沒する数も増してきた。多くはラッコ密猟船である。天保二年（一八三一）には高田屋嘉兵衛の舍弟金兵衛が、様似沖合で露船と幟合せをしたため密貿易の嫌疑を受けたが、こうした日高東部の沖合は、まさに不穩な状況にあつた。

2 縄 綴 船

当時（前松前藩政時代）蝦夷地で縄綴船という大体二百石から五百石積を限度としたこの地特有の船が用いられていた。

これは文字通り一切鉄釘を使用せず、木皮縄で板を綴つたものであるためこの名が生じたわけである。脆弱であることは免れないが、軽いので頗る使用には便利であつたという。

これは蝦夷地には良港が少ない關係から、冬は船を陸揚げして囲わねばならなかつたし、鉄釘の不自由な時代でもあつたのでこうしたものが工夫されたわけである。（なお釘合船というのがあるが、これは縄綴船に対して釘使用のものである。）

ただし良港のある方面への航行は普通の船（弁財船）を用いたと言われる。

大和船の使用は明和・安永以後のことと、蝦夷地の航運が開けてからである。従つて蝦夷で使用する船はすべて小船で丸木船と、丸木船を土台にしてこれに（胴）板を綴りつけたものであつた。前者は海洋に使つた。後者は河や湖に用いたものであり、權は車權で帆は肩帆といつて蔑を利用したものである。

これによく長途の航海に堪えたものである。

当時の航行は陸影を見ながらの岸に沿う航行であつた關係上、夜間になると船は陸揚げされ、船人は丸木を組んでこも等でこれを被うてつくつた小屋に仮泊した。和人の小船による航海もこれと同じで、縄綴船は実にこの蝦夷船を模したものである。

蝦夷地は漁場本位に船が動かねばならなかつた關係で良い港がなかつたわけである。

漁場ははじめ商場といい、次いで場所と言われるようになった。この通称は今日におよんでいる。

3 オムシヤなる儀礼

場所は知行場所のことで、内地で米をもつてしたと同じ意味である。そこで知行主と知行場所に住む蝦夷との結び付きは、オムシヤなる儀礼を以つてした。オムシヤとは蝦夷語のウムシヤの転訛であつて、蝦夷が久しぶりであつた時互に身体を撫であつて久闊を叙べる礼式のことである。

場所が知行されることになつて蝦夷の酋長と交友關係に入り、知行主は年一度介抱と称して蝦夷の希望するものを積んで知行場所に行き、ウムシヤを行い交友の印として持参の土産を贈つた。これに対し蝦夷もまた交友の印として土地の産物を返したが、この土産が知行主の収入となるのである。

しかし交友的な儀礼から出発して両者の勢力に懸隔が生ずるようになって、オムシヤは知行主が蝦夷に恩恵を施し、また制令を伝える支配的な儀礼となつて残り、交換は経済的となつて蝦夷の産物獲得のため交易船が派遣されるようになった。だから始めはそこになんら支配的な關係がなく、知行主自から赴くこともあつたが、次第に代理者を派遣するようになり、その時使われた船が縄綴船であつた。

一一 安住と信仰

神 社

未開の天地に住みつき、自然の恵みに浴した遙かな昔の先住の民は、自然と神の恩寵にとりわけ旺盛な信仰を捧げたに違いない。歴史をたどると日高の神社の創建は十九世紀の前半から行われている。

このことは、漁業の開発に伴ない航海の安全・漁場の繁栄を祈願するため、その守護神への信仰が必然的にめばえた現われで祭神によつてもうなづける。

次に江戸時代創建のものを左記する

名 称	創始と場所	主 祭 神	備 考
住吉神社	文化十一年 えりも町本町	表筒男命 中筒男命 底筒男命	幌泉場所請負人 嶋屋佐兵衛創建
襟裳神社	文化十一年 えりも町字えりも岬	保食神	全右
近浦稻荷神社	天保十三年 えりも町字近浦	全右	幌泉場所請負人 杉浦嘉七創立
笛舞稻荷神社	天保十三年 えりも町字笛舞	全右	全右
歌別稻荷神社	安政六年 えりも町字歌別	全右	全右
歌露稻荷神社	弘化三年 えりも町字東洋	全右	全右
油駒稻荷神社	弘化三年 えりも町字東洋	全右	全右
目黒稻荷神社	天保十三年 えりも町字目黒	全右	全右
船玉(魂)社	文化七年以前 油駒場所時代	金刀比羅神	全右
稻荷神社	様似 宝永元年	白玉稻荷	代官佐野仙右衛門創始
住吉神社	様似 年代不詳 創立古い	表筒男命 中筒男命 底筒男命	会所の鶴吉番屋の漁場稻荷として奉祀
鷄苦神社	様似町字鷄苦村	保食神	南部藩士一戸五左衛門の稻荷奉祀にはじまる
井寒台稻荷神社	享和元年 浦河町字井寒台	稻荷大明神	創立は福山の人佐藤嘉右衛門、当時稻荷神社と言った
浦河神社	享和元年 浦河町	保食神	明治八年稻荷神社と改称 植原屋半次郎創立
弁天宮	文化三年 三石町 三石町東蓬萊	市杵島比売神 保食神	明治十六年三石神社と改称 場所請負人小林重吉建立
稻荷神社	天保七年 三石町東蓬萊	市杵島比売神 保食神	新冠会所諸本城五右衛門、請負人浜田屋佐治平 支配人作蔵等の創建 寛政十年近藤重蔵比企可満神体を寄附して奉祀
氷川神社	文久元年 新久冠	素盞鳴尊	
義経神社	寛政十一年 取	九郎判官義経	
稻荷神社	享和以前 門別	天照大御神	

寺 院

享和二年になって箱館奉行戸田筑前守、羽田庄左衛門が、寺院建立を幕府に具申ししているが、当時露国の艦船が北辺に來航するようになったため、幕府は北海道守備の必要を感じ兵を送ろうとしたが、寺がないところには、安住土着するのを好まないのので官吏や兵士たちの葬礼追善のために寺院建立の必要を思い立つてのことであった。

翌三年には東蝦夷地より「函館より東」根室における地域に、五ヶ寺の設置が予定され、その第一期として、有珠の善光寺(浄土宗)厚岸の国泰寺(臨済宗)と共に文化元年(一八〇四)に様似に等澗院の(天台宗)の創立を見ているが、おそらく等澗院をもって、日高における寺院の嚆矢とする。その初代の名僧秀暁は日高の先驅的教化者として誉が高かった。

名 称	創建と場所	宗 派	備 考
迦葉院	文久年代 えりも岬	曹洞宗	創始道仙和尚、建立藤沢一天和尚、 初め説教所、明治二十二年 一寺建立上記の如く寺号を定めた。
観音堂	文化二年 様似町		本尊の観音本像等澗院に現存
等澗院	文化三年 様似町	天台宗	明治二十三年名利の廃絶を憂い説教 所を設けた。 明治二十年七月寺号公称

キリスト教の日高入りは相当に古いようである。正保元年(一六四四)の様似キリシタナイにおけるキリスト教徒の捕えられた物語や、寺院建立のそもその動機がキリスト教がアイヌ族に、普及することを防ぐための手段であったという説などを通じてもうなづける。